

巻頭言

慶應義塾大学商学部小野晃典研究会
第17期ゼミ長 江碯 舞香

「正解のない問いを自ら見つけ出し、その答えを紡ぐ」

今ここに完成を見た、『慶應マーケティング論究』第17巻。本論文集に収められている、私たち小野晃典研究会第17期生3人の卒業論文は、まさにその集大成である。

「勉強」と「研究」という、似て非なる2つの言葉。両者は、一体どのような点において異なるのであろうか。辞書によれば、「勉強」は、学問や芸芸などを学ぶことと定義される一方、「研究」は、物事を詳しく調べたり、深く考えたりして、事実や真理などを明らかにすることと定義される。文字だけでは、両者の違いは判然としないかもしれない。しかし、卒業論文を書き終えた私たちの目には、「勉強」と「研究」という2つの言葉が、その目的という点において、全く異なる言葉としてはっきりと映し出されている。

「勉強」の目的は、自らの無知を既知に変えることにある。自らの無知は、たいていの場合、すでに誰かが疑問に思い、そして、すでに誰かの手によって答えが与えられた問いである。したがって、自らの無知を既知に変えるという「勉強」の目的は、すでに誰かが明らかにしてくれた問いに対する答えを学ぶという、受動的な行為によって成し遂げられると言えよう。一方、「研究」の目的は、世界の無知を既知に変えることにある。世界の無知とは、誰も疑問を抱いたことのない、そして、未だ誰の手によっても答えが与えられていない問いである。したがって、世界の無知を既知に変えるという「研究」の目的は、正解のない問いを自ら見つけ出し、その問いに対する答えを、自らの手によって与えるという、極めて能動的な行為によって成し遂げられると言えよう。

世の中の学生が口にする「卒論」は、必ずしも「研究」であるとは限らないかもしれない。しかし、私たちの卒論は、紛れもなく「研究」であったと言えよう。なぜなら、私たちの卒論は、先人たちが築いてきた知見から、正解のない問いを自ら見つけ出し、その問いに対する自らの答え、すなわち仮説を、論証し、実証するという能動的な行為によって、完成したものであるからである。先人たちの知見からどのような研究課題を見出すか。その課題に対して、どのような論理を援用し、どのような仮説を構築するのか。そして、どのような実験方法によって実証するか。こうした、正解のない問いと向き合い、自らの答えを紡ぐことに挑み続けてきた私たちには、常に、正しく、深い思考が求められた。そして、こうした「研究」の成果として、私たちは、それぞれの分野で、「研究」の進展、ひいては学問の進展に貢献を成したのである。

学問の発展は、「勉強」という受動的な行為によっては到底成し遂げられない。「研究」という能動的な行為によってのみ、成し遂げられるのであろう。私たちは、これからも社会の発展に貢献できるよう、正解のない問いを自ら見つけ出し、その問いに対する答えを、自らの手によって与えることに挑み続けていきたい。

こうして私たち小野晃典研究会第17期生3人が大学生としての本分を全うし、その成果である本論文集を完成させることができたのは、本当にたくさんの方々が支えてくださったおかげである。末筆ながら、この場を借りて、私たちを支えてくださった方々に、誠意を込めて感謝の意を表したい。

まずは、同研究会第18期生の後輩の皆さんへ。同期一丸となってゼミ活動に邁進する皆さんの姿は、幾度となく私たちを鼓舞してくれました。また、ゼミの時間には、いつも積極的に意見を述べてくれた皆さんのおかげで、人数が少なくとも活発な議論を交わすことができました。1年間、同じチームのメンバーとして、苦楽を共にすることができた後輩が皆さんでよかったと、心から思います。本当にありがとう。

次に、同研究会第16期生の先輩方へ。私たちが、こうして卒業の日を迎えられたのは、どんな時も私たちを見捨てずに、時に優しく、時に厳しくご指導してくださった先輩方のおかげです。「何事にも全力で取り組み、成果を出す」先輩方の姿は、ずっと私たちの憧れであり、目標でした。私たちは、そんな憧れの先輩方と共に、ゼミ活動に精を出して取り組んだ日々を絶対に忘れません。本当にありがとうございました。

さらに、同研究会大学院生としてご指導くださった、石井隆太さん(第10期OB)、王 咏奕さん(第16期大学院)、於 詩琦さん(第17期大学院)、飯井虹之介さん(第18期大学院)、王 珏さん(第18期大学院)へ。大学院生の先輩方の豊富な知見と鋭いご指摘は、私たちの論文の完成を大いに後押ししてくださいました。先輩方の存在なくして、本論文集は完成し得ませんでした。本当にありがとうございました。

そして、家族へ。2年間、たくさん迷惑と心配をかけてしまったけれど、私たちを応援し続けてくれた家族の存在があったからこそ、何不自由なく、ゼミ活動に没頭することができました。ゼミで嬉しかったことや楽しかったことがあった日には、一緒に過ごせるわずかな時間に、たくさん話を聞いてくれました。疲れきって帰った日には、「お疲れさま」と声をかけ、温かいご飯を用意してくれて、心安らぐ時間を与えてくれました。どんな時も温かく見守り、支え続けてくれて、本当にありがとう。

最後に、慶應義塾大学商学部教授の小野晃典先生へ。小野先生は、2年間、ビジネスコンテストや論文執筆活動からゼミ運営に至るあらゆるゼミ活動において、未熟者な私たちを最後まで導いてくださいました。論文執筆活動においては、どんなにお忙しい時にも、昼夜を問わず幾度となく懇切丁寧なご指導を賜り、ゼミ運営においては、私たちが予測できないはるか先を見通したご助言を賜りました。小野先生は、ご指導して下さる際、問題の全てを指摘せず、ゼミ生自らが問題の出現に気づき、その答えを見つけられるよう後押ししてくださいます。これは、人に指摘されて初めて、自らの思考の曖昧さに気がつくのではなく、人に指摘されずとも、正しく、深く思考し続けることで、自分自身に、そして周囲の人々に対して、正しく、深い道を示して欲しいという、小野先生の願いが込められていたのだと思います。未熟者であるがゆえに、いつも時が経ってから先生のお言葉の真意を理解する私でしたが、その度に、小野先生への尊敬の念が、ますます深く胸に刻まれてゆきました。小野先生ほどに、一人の研究者として、そして、一人の人として、ゼミ生の成長を願ってくださる先生は、存在しないと思います。小野先生の教え子として、2年間研鑽を積めた私たちは、きっと、他のどの学生よりも幸せな学生です。このことを誇りに思い、小野晃典研究会第17期OB・OGとして、より良い社会の実現に貢献できるよう、これからより一層精進してまいります。小野先生、2年間、愛情いっぱいにご指導して下さり、本当にありがとうございました。

2021年2月吉日